

中金堂

2018年に完成した中金堂は、興福寺で最も新しい建物であり、3世紀以上の間で初めてのフルスケールでの堂宇の再建である。金堂とは、お寺の中心となる建物で本尊をお祀りしている。仏像は通常、金箔が貼られているため、光を反射し、黄金の輝きを放つ。この光が、知恵の光によってこの世界を照らし出すという仏教の教えと対照している。

歴史上、興福寺の伽藍の中央には3つの金堂があった。最も古く、最も重要なのが中金堂であった。この名前は、伽藍の中心に位置し、東金堂と西金堂の間に位置することからつけられた。710年から714年の間に、興福寺の創設者である藤原不比等（659～720年）の命により建設された最初の中金堂には、仏陀釈迦牟尼の像と4人の菩薩、四天王などが安置され、また未来の仏陀である弥勒の浄土を描いた2組の図像も収められていた。

何世紀もの間に、中金堂は7度もの火災に遭った。7度目の火災から約100年後の1819年に奈良町の人々の寄進によって、本来の規模より一回り小さい仮の金堂が建てられた。しかし老朽化が進んだので、1975年に中金堂北の講堂跡に仮金堂を立て本尊を祀っていた。新しい中金堂は、714年の最初の建築と同じサイズで、建築様式もこれを踏襲している。2018年10月に、手の込んだ落成法要を経て奉献され、現在は一般に公開されている。